

## 語りの手法と視点をめぐって（その二）

—— S. Maughamの“Virtue”(1931)と  
一人称単数による語りを中心に<sup>1)</sup> ——

高 橋 玄 一 郎

### 0.はじめに

本稿は拙稿（2002）の続編である。

拙稿（2002）ではまず、S. Maugham の *Six Stories Written in the First Person Singular* の1938年版の作家自らのPrefaceをもとに次のような語りの手法と視点について考察した。

- 1) 全知の視点からの語り
- 2) 物語の登場人物のなかの一人の視点からの語り
  - (a) 脇役的観察者の視点からの場合
  - (b) 主役の視点からの場合
- 3) 一人称単数（すなわち私）の視点からの語り
  - (a) 主役の視点からの場合
  - (b) 脇役的観察者の視点からの場合

---

<sup>1)</sup> 本稿の文体論的考察の対象となる S. Maugham の短篇“Virtue”(1931)は、その作品への部分的言及に際し、拙稿（2002:56）では Heinemann 版の初刊本 (*Six Stories Written in the First Person Singular*, William Heinemann Ltd., London, 1931) に基づいて該当頁を記したが、本稿執筆時には事情によりそれを手元に用意できなかったため、本稿における作品への部分的言及に際しては便宜上、松柏社の大学テキスト版 (W.S. Maugham: *The First Person Singular*, 後藤 武士 (編注) 松柏社, 東京, 1959) の該当頁を記載することとする。

これら5種の語り的手法を長所、問題点をまじえながら提示したうえで、モームは、上記(3b)の「脇役的観察者としての一人称単数の視点からの語り」を相対的に高く評価している。

次に、同作家による短編“Virtue”(1931)における一人称単数による語りを考察していくための端緒を確認した。それは次の3点であった。

- 1) 短篇“Virtue”は「脇役的観察者としての一人称単数の視点からの語り」によって描かれている。
- 2) 「脇役的観察者としての一人称単数の視点からの語り」によって、書き手と読み手との間に親密な関係を効果的に生み出せる(ラポールの醸成)。その結果、エッセイ風の魅力を物語の中に吹き込むことができる。それがうまくいけば、厳格な規範を固守する物語に座談的な雰囲気、やや楽天的な趣きを添えることとなり、その結果、読み手がその物語を比較的気楽に読めるようになる(モームの技巧上の狙い)。
- 3) また、「脇役的観察者としての一人称単数の視点からの語り」は、全知の語り手とは異なり、知らないこと、気づいていないことは率直に認める。自ら知っていること、気づいていることのみを語るという態度と叙述は、物語にまことしやかな趣を与えることになる。また同時に上に示されたような態度で語られる物語の展開を、読み手は語り手と共に徐々に分かっていく過程の満足感を共有できる。

これらをもとに、拙稿(2002)では上記の(2)に関連して、短篇“Virtue”のエッセイ風の趣がにじみ出ているくんだり、会話部分の、ある一描写をとりあげて、語り手と読み手の間に醸成される親密感(ラポール)に

ついて若干のコメントを施した。

本稿では、これらを踏まえた上で、標題の趣旨に沿って拙稿(2002)で扱えなかった考察を試みることにする。

本稿の構成は以下のようなものである。

1. 認識様態的表現 (Epistemic Modal Expressions) と一人称単数の語り
2. 話法の枠組みから見た一人称単数の語り手と登場人物の声の相対的強さ
3. 結語

なお、これら2点の考察はモームの短篇 "Virtue" をもとに行われるため、拙稿(2002)で示した登場人物のリストと作品の梗概を今一度ここで確認させていただきたい。

この短篇の主要な登場人物は以下の通りである。

(1) I (1人称単数の代名詞)

- a) 物語を初めから終わりまで導く1人称単数の語り手としての「わたし」
- b) 登場人物のひとりである「わたし」特に物語の「前口上」で個性化されているような、落ち着いた余裕のある生活を享受できる人物；かつて医学生であった。

(2) Gerald Morton: ボルネオの district officer で現地の道路建設の責任者；28歳 独身。

## (3) The Bishops (Bishop 夫妻)

- a) Charlie Bishop: 病理学者 ; 55歳前後; 小柄で格幅がよく陽気で短気 ; 毒舌が多い。
- b) Margery Bishop: Pretty ではないが魅力的な女性 ; Charlie より10歳ほど若い。

## (4) The Marshes (Marsh 夫妻)

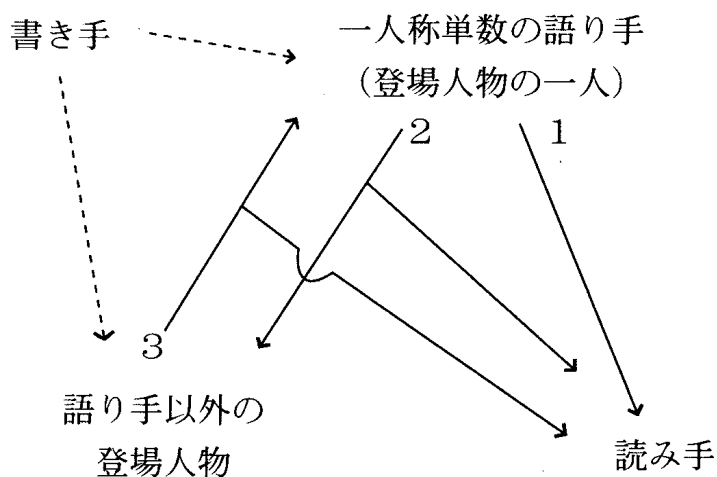
- a) Bill Marsh: Charlie と同じクラブ (ロンドン) のメンバー。
- b) Janet Marsh: 世話好き ; 好奇心旺盛。

物語の大筋は次のようなものである。

ボルネオで1週間 Morton に世話をしてもらったことのあるわたしが、ロンドンで偶然 Morton と再開する。わたしは久しぶりに戻った彼をもてなそうと友人の「おしどり夫婦」、Charlie と Margery にも声をかけて彼をロンドンのクラブでの夕食に誘う。その会で一緒にダンスを踊ったことがきっかけで Morton と Margery は惹かれ合うようになる。貞節を忘れず、Morton への正直な思いを語る Margery とそれをからかう Charlie。Margery は Charlie のもとを去る。Morton は仕事で再びボルネオへ引き返すが、Morton の後を追うつもり Margery と Charlie の仲はすぐには元通りにならない。Charlie を慰めるため、わたしと Bishop 夫妻がいろいろと彼を気遣うが、酒におぼれ不眠に悩まされた彼は睡眠薬の多量摂取により亡くなる。Charlie の死をめぐる検死では事故死とされるが、自殺の可能性もありうる。真相は明示されない。一方 Margery は、Morton からの手紙で Borneo へは行けないことを悟る。美德であるべき貞節へのこだわりが、かえって仇となり、結果として死と不幸を招いたという皮肉な結末が示される。

さらに、語りの構造の一端を示す関係図をあげて確認しておこう。<sup>2)</sup>

<sup>2)</sup> 拙稿 (2002:51) で示された関係図にはその後の説明で言及される番号が記載されていなかった。そのため、本稿でその表示の不備を正した。



## 1. 認識様態的法表現 (Epistemic Modal Expressions) と一人称単数の語り

認識様態的法表現とは、例えば荒木・安井 (1992; epistemic modality の項) によれば、「話し手自らの知識に基づく可能性、必然性の判断を表す法表現 (例えば、*may*, *must* などの法助動詞 (modal auxiliary) や *possibly*, *perhaps*, *maybe* などの法副詞 (modal adverb))」、さらには、「話し手自らの知識に基づく判断という概念を広く捉えて可能性と必然性だけではなく、蓋然性 (probability)、確実性 (certainty)、伝聞 (hearsay)、有り様 (appearance) を表す表現も含めうる。

一口で言えば、認識様態的法表現とは話し手の主観的、客観的判断が多かれ少なかれ介在する表現であるといえるであろう。とすれば、このいわば人間的な視点や判断を基盤とする認識様態的法表現が、(全知の語り手とは異なる) 一人称単数の語りの表現効果を高めうる方向で機能する、と考えられよう。その主要な効果とは、「語り」に個人的な人間味が添えられる点ではなかろうか。また、そのような点から物語に真実味や迫真性が生まれてくるように思われる。

用例を幾つか観察してみよう。便宜上、当該箇所には番号と下線をつけておく。下線部 <1> から <3> までの認識様態的表現はそれぞれ順番に、*could, thought, I dare say* である。

Two or three days later I got a telephone message from Margery <1> asking if I could see her. She suggested coming to my rooms. I asked her to tea. I tried to be nice to her; her affairs were no business of mine, <2> but in my heart I thought her a very silly woman and <3> I dare say my manner was cold. She had never been handsome and the passing years had changed her little. She had still those fine dark eyes and her face was astonishingly unlined. She was very simply dressed and if she wore make-up it was so cunningly put on that I did not perceive it. She had still the charm she had always had of perfect naturalness and of a kindly humour.

(Maugham 1959: 55-56)

<1> は「わたし」が Margery と会えるかどうかの可能性が問題となる認識様態表現である。この描写の時点では会えるという前提はない。しかし、その後の文脈で、「わたし」が Margery のお願い通りに会う方向に気持ちを向けていくことがわかるが、その方向性を決定するのは「わたし」の判断の問題であり、読み手にも全く問題なく、ごく自然に理解できる箇所であろう。このようなふつう意識にのぼらないような可能性の判断も、個人的な人間味に通じていると思われる。

<2> は「実際は、彼女 (Margery)はおろかな女性だと思った」というのだが、このような判断を示す動詞 *thought* が後に目的語 *her* と補語 *a silly woman* をとっていることから、いつも Margery をおろかだと思

っているわけではなく、一時的な判断としてそう思っているという含みを感じられる。この点も個人的な人間味を喚起する箇所となりうるのではないだろうか。

<3> は「おそらく、(Margery に対する)「わたし」の態度は冷たかったであろう」ということを示すが、この判断は自分のとった態度を振り返り、それを Margery がどう受け止めたかという洞察があったことをも示唆している。このような、断定を避ける言い回しの中にも「わたし」からにじみ出る人間らしさに通じるものがあると思われる。

以上の3例の認識様態的表現に感得されうるような人間味は、読み手にも自然と浸透し、フィクションでありながらもそこに真実味を醸し出すものがあるように思われる。

もうひとつ別の場面で一ヶ所、考察してみよう。便宜上、発話者名を各発話の冒頭に記している。

Margery: "I want you to do something for me if you will," she began without beating about the bush.

I: "What is it?"

M: Charlie is leaving the Marshes today and going back to the flat. I'm afraid his first few days there will be rather difficult; it would be awfully nice of you if you'd ask him to dinner or something."

I: "I'll have a look at my book."

M: "I'm told he's been drinking heavily. It's such a pity. I wish you could give him a hint."

I: "I understand he's had some domestic worries of late," I said, perhaps acidly. Margery flushed. She gave me a pained look. She winced as though I had struck her.

[Maugham 1959: 56]

酒を飲み過ぎている Charlie を案じる Margery に対して、語り手の「わたし」が下線部のように「最近、彼は家庭内の心配事を抱えているらしいね。」と発話した際の、発話の形容の仕方に注目したい。自分の言い方を“perhaps acidly”と形容している。下線部の自分の発話が、Margery に対して恐らく辛辣に聞こえたであろう、という具合に、Margery の心の内なる印象について一人称の語り手が推察しているわけである。人間的な 1 人称の語り手による語りそのものと、その視点から描かれる、あくまでも外面的な Margery の様子とが、この場面の無理のない人間味のある臨場感を醸し出しているように思われる。

## 2. 「話法」の枠組みから見た一人称単数の語り手と登場人物の声の相対的強さ

発話あるいは思考の描写法を話法と呼ぶとするならば、どの視点から描写するかによって、発話の場合と思考の場合とで、それぞれ5つの話法がありうる。後の考察に備えるため、その話法の枠組みについて齊藤（2000：119）に即して確認しておこう。長崎にいるのが好きである旨の発言もしくは思考を仮に彼と言う人物がおこなったとするならば、その話法の表現上の可能性は次のようになる。

### (A) 発話の話法

1. He said that he liked it there in Nagasaki. (間接話法)
2. He said, “I like it here in Nagasaki!” (直接話法)
3. I like it here in Nagasaki! (自由直接話法)
4. He liked it there (語り手の視点によっては here) in Nagasaki.  
(自由間接話法)



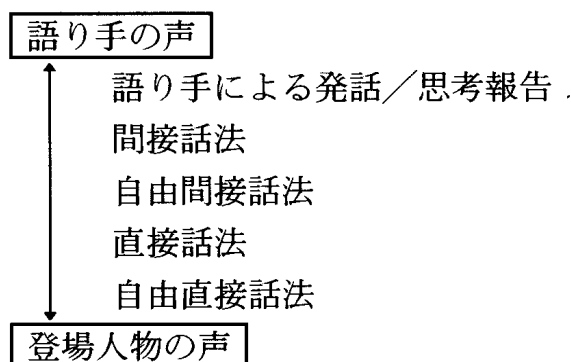
5. He expressed his pleasure at being in Nagasaki. (語り手による発話)

(B) 思考の話法

1. He thought that he liked it there in Nagasaki. (間接話法)
2. He thought, I like it here in Nagasaki! (直接話法)
3. I like it here in Nagasaki! (自由直接話法)
4. He liked it there (語りの視点によっては here) in Nagasaki!  
(自由間接話法)
5. He thought of his pleasure at being in Nagasaki.  
(語り手による思考報告)

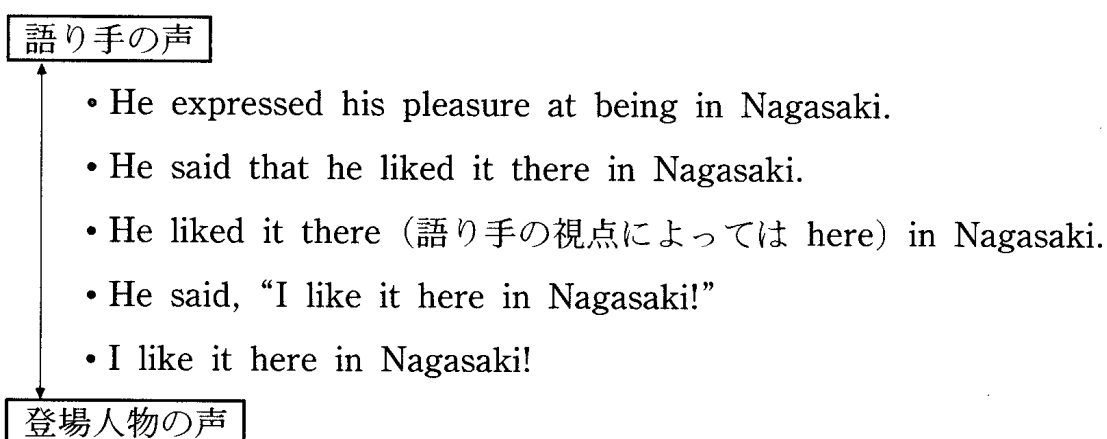
基本的な話法である直接話法と間接話法には、伝達節（誰が（場合によっては誰に対して）発話／思考したのかを示す節）と被伝達節（発話内容もしくは思考内容を示す部分）があるが、話し手が誰であるかが文脈上分かる場合にはおのおのの伝達節が省かれる場合がある。そのような話法を、元の話法名称を基準として名付けて、自由直接話法、あるいは自由間接話法と呼ぶ。

語り手の声と登場人物の声を両極とした場合、その声の強さのスケール上に発話や思考の表現に関する話法を並べてみることができる。以下にそれを示す（斉藤 2000: 120）。



語り手の声が最も強く出るのが、語り手による発話／思考報告であり、一方、登場人物の声が最も強く出るのが自由直接話法ということになる。そしてその両極の間に位置する話法は、語り手の声が弱まる方向で順序付ければ（あるいは別の言い方をすれば、登場人物の声が強まる方向で順序付ければ）間接話法、自由間接話法、直接話法という並びとなる。自由間接話法はスケール全体のちょうど中央に位置し、語り手の声と登場人物の声とがほどよく合わさった話法ということになるろう。

念のため先に例示した発話の話法の例文をこのスケールに置いて表現の差を確認しておこう。



以上のような話法の枠組みを踏まえた上で、Maugham の短篇 “Virtue” (1931) の一場面を取りあげて、語り手と登場人物の声の強さの変動が語りの内容とどのような関係を持ちうるのかを考察してみる。

次のくだりを見てみよう。観劇の待ち合わせ場所に姿を見せない Charlie を案じて、友人の Bill Marsh に電話をかけた折り、語り手であり、登場人物のひとりでもある「わたし」が Charlie の死を知らされる場面である。便宜上、各文の冒頭に番号を付してある。

(...) <1> I put a call through from the dining-room to the Marshes and presently was told by a waiter that Bill Marsh was at the end of the wire.

<2> "I say, do you know anything about Charlie Bishop?" I said. <3> "We were dining together and going to a play and he hasn't turned up."

<4> "He died this afternoon?"

<5> "What?"

<6> My exclamation was so startled that two or three people within earshot looked up. <7> The dining-room was full and the waiters were hurrying to and fro. <8> The telephone was on the cashier's desk and a wine waiter came up with a bottle of hock and two long-stemmed glasses on a tray and gave the cashier a chit. <9> The portly steward showing two men to a table jostled me.

<10> "Where are you speaking from?" asked Bill.

<11> I suppose he heard the clatter that surrounded me.

<12> When I told him he asked me if I could come round as soon as I had finished my dinner.

<13> Janet wanted to speak to me.

<14> "I'll come at once," I said.

(...)

[Maugham 1959: 62]

<1> は一人称単数の語り手「わたし」の視点から登場人物のひとりでもある「わたし」が食堂の給仕に電話を Bill につないでもらうという客観的な描写である (語り手による行為報告)。<2> は「わたし」が電話口

で友人 Bill に向かって Charlie の情報を訪ねる場面であるが、登場人物のひとりでもある「わたし」の視点から直接話法が用いられている。〈3〉では視点は変わらぬまま、伝達節が省かれて自由直接話法となっている。〈4〉と〈5〉も被伝達部の発話形式と内容から見て「わたし」の視点からの自由直接話法とみてよい。〈6〉は登場人物のひとりでもある語り手が〈4〉と〈5〉の自分の発話状況の説明とその声の様子を耳にした食堂の他のお客たちの反応を語っている（語り手による状況・観察報告）。〈7〉、〈8〉、〈9〉も〈6〉と同じ視点から食堂内の様子が語られている。〈10〉では視点が Bill に移り、直接話法が用いられている。〈11〉では語り手の視点から〈10〉で「わたし」の居場所を尋ねられたわけを推察している（語り手による思考報告）。〈12〉では2つの間接話法が用いられている。つまり When I told him の部分（従属節）と he asked me if 以下の部分（主節）でそれぞれ間接話法が用いられている。前者には被伝達部が省かれている。わたしの居場所は読み手には百も承知であるからである。〈13〉では Bill の妻であり、かつ Charlie の周辺の事情をよく知っていた Janet に視点が移動し、〈12〉で Bill が「わたし」に来て欲しいと頼んだわけが語り手を通して語られている。この〈12〉はそもそも Bill から電話で聞かされた内容であろうから、全体としては語り手による伝聞報告である。〈14〉では再び語り手であり登場人物のひとりでもある「わたし」に視点が戻り、直接話法が用いられている。

以上のような話法の流れを整理してみよう。

- 〈1〉 語り手による行為報告（客観的な描写）
- 〈2〉 直接話法 (I → Bill)
- 〈3〉 自由直接話法 (I → Bill)
- 〈4〉 自由直接話法 (I → Bill)

- < 5 > 自由直接話法 (I → Bill)
- < 6 > 語り手による状況・観察報告
- < 7 > 語り手による状況・観察報告
- < 8 > 語り手による状況・観察報告
- < 9 > 語り手による状況・観察報告
- <10> 直接話法 (Bill → I)
- <11> 語り手による思考報告
- <12> 間接話法 (従属節内: I → Bill) + 間接話法 (主節内: Bill → I)
- <13> 語り手による伝聞報告
- <14> 直接話法 (I → Bill)

ここで注目すべきは、登場人物のひとりである「わたし」の声から <2> から <5> にかけて最も強く響いてから、<6> から <11> でいったん全く途絶え、<12> から <14> にかけて再び徐々に現れてくる点である。声が消える前の <4> で登場人物のひとりであるわたしは Charlie の突然の死を知らされ、声途絶える直前の <5> では驚嘆の声が周囲にいた客達の目を上げさせる程強く響いているのである。登場人物のひとりとしての「わたし」の声が消失している間は、一人称単数の語り手の声 (<6> ~ <9> と <11>) と 電話の相手の Bill の声 (<10>) が響いている。この点の声の切り替わりにおいて、登場人物のひとりとしての「わたし」と一人称単数の語り手である「わたし」が実質的には同一でありながらも、峻別されるべき意義を見て取れるように思われる。そして、物語の現実世界と直接に接触している登場人物のひとりとしての「わたし」の声の大きさの推移は、Charlie の死の知らせを受容していく心理的過程を反映しているとも思われる。

### 3. 結語

以上、本稿では、脇役的観察者としての一人称単数の視点からの語りの考察を、S. Maugham の短篇“Virtue”を言語資料として、認識様態的表現という観点といわゆる話法という観点から試みた。

### 参 考 文 献

- 荒木一雄・安井稔 (1992) 『現代英文法辞典』 三省堂, 東京.  
斎藤 兆史 (2000) 『英語の作法』 東京大学出版会, 東京.  
高橋玄一郎 (2002) 「語りの手法と視点をめぐって —— S. Maugham(1931) の “Virtue” と 1 人称による語りを中心に ——」 『活水論文集: 英米文学・英語学編』 43, pp. 37-57, 活水女子大学・短期大学.

### テ キ ス ト

- Maugham, William, Somerset (1959) *W.S. Maugham: The First Person Singular*, 後藤 武士 (編注), 松柏社, 東京.

2003年1月31日受理

**Abstract**

**Narrative Methods and Viewpoints (II):**

S. Maugham's "Virtue" (1931) and  
the Narration of the First Person Singular

Gen-ichiro Takahashi

Two attempts are made in this paper to consider the narration of the first person singular in S. Maugham's "Virtue" (1931) in terms of (1) epistemic modal expressions such as modal adverbs and modal auxiliaries and (2) five sorts of narrative speech which come from the viewpoints from which a certain event or state can be described.